

タイトル	日常と災害をつなぐパラレルな活動をする看護師の研究
著者	太田, 晴美; OTA, Harumi
引用	
発行日	2018-03-21

〔 1 〕

氏 名 ・ (本籍地)	おお た はる み 太 田 晴 美 (北海道)
学 位 の 種 類	博士 (経営学)
学 位 記 番 号	博 (経営) 甲第 1 3 号
学位授与の日付	平成 3 0 年 3 月 2 1 日
学位授与の条件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 目	日常と災害をつなぐパラレルな活動をする看護師 の研究
論 文 審 査 委 員	主 査 教授 澤 野 雅 彦 副 査 教授 小 島 康 次 副 査 教授 大 平 義 隆

論 文 内 容 の 要 旨

筆者は、数少ない災害看護の専門家であり、コソボやアフガニスタンなどに派遣された経験を持つ貴重な人材である。そのため、現在でも災害が起こるたびに連絡を受け、自ら災害地に赴いたり、後方支援に当たったりしている。その傍ら、地元では、「北海道災害看護支援コミュニケーション(EZO 看)」と呼ばれる研究会を組織し、災害看護に派遣できる人材を育成している。

そして、この EZO 看に集まる看護師たちが、災害看護の技量を高めるのみではなく、日常看護やその他の面でも能力を高めているのではないかという印象を持っている。本論文では、その EZO 看に集まる看護師たち (17 名) 及び、その上司にあたる看護部長や看護師長たち (7 名) にインタビューすることによって、EZO 看に参加して活動することが、どのような能力を引き出しているかを考察したものである。データ収集は、半構造化面接法を用いた方法を用い、データ分析は、インタビューから逐語録を作成し、類似性のあるコードを抽出してサブカテゴリー化、さらにサブカテゴリー間の関連性を考えながら抽象度を高めコアカテゴリー化する方法が使われている。

論文では、まず第 1 章から第 3 章まで、災害看護についての概略の記述の後、

日本で起こった災害を辿り、1995 年の阪神淡路大震災以降、どのように災害看護が変遷したかについて 2009 年の看護基礎教育カリキュラム改正で、災害看護学が明示されるまでが説明されている。そして第 4 章では EZO 看の詳細な説明が続き、第 5 章でパラレルキャリアの概念が説明される。パラレルキャリアとは、本業の他に活動する場を持つことであり、そのメリット・デメリットが考察されている。EZO 看の活動は、その典型といえ、この概念を使ってこの後の考察が行われることになる。

第 6 章では、以前行った災害看護に向かう看護師の動機や特徴が報告され、第 7 章以降で、いよいよ今回の調査結果が報告される。第 7 章は、EZO 看メンバーの上司にあたる、看護管理者の調査である。第 8 章は、EZO 看メンバー自身の調査となり、第 9 章では、両者の比較が行われる。そして、第 10 章が全体のまとめとなる。

看護管理者、メンバーともに 4 つの軸《コンピテンシー》、《パーソナリティ》、《レディネス》、《その他》とそれぞれのカテゴリーは同様のものとなった。まず、コンピテンシーでは、裁量の範囲や、創意工夫する力、突発的な事象への対処、対応力、などを養っており、これらは危機に直面した時にはじめて発揮するのは難しい能力といえ、EZO 看での訓練が、有事の際の応用力に結びついていると推測できる。また、対象に合わせた教育企画、工夫などは、本人が感じているだけではなく、管理者からも評価が高かった。

パーソナリティとしては、本来持っている積極性や物怖じせずに取り組んでいく姿勢に加えて未知の分野に果敢に挑戦していく姿勢が強化されていたという結果が見られた。レディネスという点では、日常と災害を分離するのではなく、看護師である以上はどのような場面においても看護実践力を発揮することの重要性を捉えるようになっていた。その他としては、管理者サイドからの評価として、広告塔の役割を担い、職場への愛着を持つようになり、他者へ自施設の良さを強調できるようになったという点が見られ、一方メンバーサイドでは、子供への好影響をあげたものが多かった。

以上のような調査結果から、管理者は、災害に興味を持つ人を見つけ、伸ばすよう支援することで、職場の備災力が 2 倍にも 3 倍にも広がる可能性があり、管理者の関わり方いかんで、メンバーは施設への愛着心が生まれ、外部活動時にも自施設を背負うという責任感を持つこともでき、互いに大きな利益になり得ること。また、日常と災害をつなぐパラレルな活動は、職場と災害看護組織という社会活動を行いながら、個々が学び成長している。同時に、看護師のパラレルキ

キャリアは、自律して考え、行動し、組織へ貢献するという連鎖を生み出し、職場と社会活動双方で生きると結論づけている。

論文審査結果の要旨

1 審査の経過

平成29年12月5日に博士請求論文が提出され、同年12月8日の大学院経営学研究科博士（後期）課程委員会（以下、研究科委員会という）において、審査委員に、主査澤野雅彦、副査小島康次・大平義隆が選任された。その後、慎重に審査が進められ、平成30年2月3日に公開報告会が開催され、同年2月5日に口頭試問がおこなわれた。

2 評 価

まず、看護師メンバー17名と看護管理者7名という多数の対象者に対してインタビューを行い、結果をまとめて論述した労作である点を評価しなければならない。調査結果をうまくまとめて、読み応えのある論旨を導き出している点も、高く評価できる。

口頭試問では、調査の方法論に関する記述が少なく、充分ではないという批判が出たが、これには口頭で過不足なく答えており、博士論文としての価値を著しく低下させるものではないことが確認された。

東日本大震災を契機に、医療機関は、事業継続計画（BCP：Business Continuity Plan）の策定と運用が求められるようになったが、職員教育など平時の対策が未だ充分とはいえない状況で、本論文は、緒に就いたばかりの平時の災害看護教育に対して、何をどう備えるべきかといった問題点と解決の方法を示唆しており、今後の実践に大きく貢献する論考と高く評価できるであろう。

3 学内の手続き

本研究科では、（1）業績資格、（2）中間報告会・公開発表という課程博士の学位論文の提出資格を確認し、審査委員会を平成29年12月8日に設置した。

また、本研究科では、課程博士学位請求論文者には、審査期間中の報告会を課している。平成30年2月3日に審査期間中の報告会・公開発表を行った。そして、同年2月5日に博士（経営学）学位論文審査委員会において、審査員全員出

席のもとに本論文について申請者の説明を求めたのち、関連事項の質疑を行った。
その結果、審査委員全員により合格と判定された。

提出された論文の審査ならびに文書及び口頭による最終試験の結果は、本学学位規則第7条に基づき平成30年2月16日の研究科委員会で審査委員長から報告され、同日から同年2月23日までの間、研究科委員会の委員の閲覧に供するため博士論文の公開を経て、同年の2月23日の研究科委員会での審査の結果、同論文を合格と決定した（同規則第8条第1項）。

その後、同年3月7日の北海学園大学大学院委員会において、同論文に関する研究科委員会の審査経過ならびに論文要旨が報告、承認され（同規則第10条2項）、これにもとづき同年3月21日、博士（経営学）の学位が授与された